

## エッセイ 中東奮闘記―湾岸50年、オイルマンの軌跡

### 第十五回 日本オマーンクラブ設立

遠藤晴男

(日本オマーンクラブ名誉会長)

#### 15-1. 「オマーン見聞録」を出版 - 「人とモノの交流 つぶさに描く」

1995年にサイマル出版会から「オマーンが見えてくる」を出版した後、私は2001年に第三書館から「アラビア半島とどう付き合うか」を出版した。アラビア半島は、日本のエネルギー確保の上で大切な地域である。この地域の日本を見る目は熱いが、この地域への日本の関心は薄い。

当時、一般には、中東というとエジプトやパレスチナなどがより知られており、アラビア半島の国で頭に浮かぶのはサウジアラビアぐらいであった。アラビア半島に対しては違和感を持つ日本人が多かった。日本とは異なる服装、最高4人の妻を娶れること、アルコール・ギャンブル・豚肉の禁止、1日に5回お祈りをするイスラームの義務などなど。さらには、テロが頻発する危険な地域というイメージを持つ人も多いただろう。

「この地域の実際の姿を、日本の人々に知って貰いたい」との思いから、石油を求めてカバン一つでこの地域を走り回った中での体験、またそれまでのアブダビとオマーン駐在時の見聞を基に書いた本であった。

内容は、アラビア半島の重要性、日本との相違点と類似点、日本とアラビアのビジネス上の相違点と類似点、アラブ人の価値観、アラビア半島の現状、アラビア半島理解のキーワード、アラビア半島との付き合い方、アラビアからの視点、日本からアラビアへの発信などであった。

私は社会的に無名で、出版業界との縁も薄い。出版に当たって今度もどの出版社に当たったらよいか分からなかった。友人に話したら、「『第三書館』というところが中東関係の本をそこそこ出版している」ということを聞いた。調べてみると、高名な中東学者もここから本を出している。そこで、まったくの飛び込みで同社に原稿を送った。

何日か経って、同社から「出版しましょう。社に来てください」という連絡が入った。新宿区大久保のやや広い通りに面した小さなビルの中にあった事務所内には本棚が林立し、雑然としていたのを覚えている。そこで、初めて会った北川社長から「出版します。ただ、2000年2月28日にその権益が失効したアラビア石油問題についての論考も加えて欲しい」という要請があり、これを原稿に書き加えた。

この本を出版した後、既述の通り2004年1月にマスカットで「オマーン日本親善協会設立30周年記念講演の講師依頼を引き受けた。演題は「日本オマーン交流史」。いざ、

準備にかかってみると、日本ではアラビアとの交流に関するまとまった文献が見当たらなかったため、自分なりに資料を集めて講演の原稿をまとめ上げた。

この過程で、地理学者の志賀重昂が1924（大正13）年に日本人として最初にオマーンに行ったように思っていたが、江戸時代の初めにすでにカトリックの司祭になるべくローマを目指したペトロ岐部がマスカットに行ったらしいこと、1880（明治13）年に古川宣譽陸軍工兵大尉が訪問したこと、その数日後に日本の軍艦「比叡」がマスカット港に入港し、艦長である伊東祐享海軍中佐以下がトルキー国王に謁見をして親書を受け取っていることなどを知ることができた。

また、明治以降の日本とオマーンとの貿易の発展についても整理し、文化的に日本とオマーンの間には古くから乳香を通じた交流があったことを知り、金平糖とともに日本に初めて輸入された砂糖菓子で、1960年代の後半までは結婚式の引出物によく用いられていた有平糖が、ポルトガルを介してオマーンと繋がっているかもしれないことなども想起することができた。

2007年の「勲一等カブース国王陛下文化・科学・芸術勲章」の受賞を機に、この「日本オマーン交流史」の講演原稿に新しい情報を書き加えて、私は「オマーン見聞録」を書き始めた。

そこには、オマーンという国、オマーン・ルネサンス、オマーンと東アジアの関係、日本人のアラブ発見、オマーンと日本とのヒトの交流、志賀重昂とタイムール国王、タイムール国王の滞日とブサイナ王女、オマーンと日本とのモノの交流、オマーンと日本との文化の交流、1970年以降のオマーンと日本、「オマーンへのいざない」と題してオマーン各地の紹介、「オマーンと日本」と題してオマーンの魅力と21世紀のオマーンと日本、さらに広げてアラビア半島と日本とのヒト・モノ・文化の交流史も書き込んだ。

新たな情報を集めるために、国立国会図書館、横浜市立中央図書館、東大の東洋文化史研究所図書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所史料閲覧室などに通った。このうち、横浜の中央図書館には、とくによく通った。夏の太陽がキラキラと照らす中を汗を拭きながらの桜木町駅から野毛の坂道の登りがきつかったことは記憶に残っている。また、イギリスのエクセター大学にも足を伸ばした。

さて、原稿ができ上ってどこの出版社から出すかという段になって、1995年にサイマル出版会から「オマーンが見えてくる」を出版した時に編集を担当してくれた赤羽のことを思い出した。先に、「サイマル出版会を退社し、独立した。今後本を出すようなことがあったら、お手伝いさせてください」という電話をもらっていたからであった。そこで彼に電話をすると、「原稿の校正は自分が担当する。出版社は展望社ではどうか。社長をよく知っている」とのことであった。

私は展望社という出版社を知らなかったが、社長は元は講談社にいた人で、独立してこの会社を設立したと聞いた。本は、所要の作業を終えて、2009年4月6日に出版された。

5月中旬になって、赤羽から上ずった声で電話があった。「遠藤さんの本、朝日新聞の書評欄に載ります」という内容。新聞の書評欄に載るということがどういうことかよく分かっていない私は、その時「ああ、そう？」というような反応しかできなかった。

そして、事前に知らせのあった5月24日の日曜日付けの朝日新聞朝刊の書評欄をみたら、中東学の泰斗である京都大学の杉教授が書いた「人とモノの交流 つぶさに描く」という見出しで、拙著の「オマーン見聞録」が取り上げられていた。「オマーンは地理的には日本に一番近い国、しかし日本での認知度は低い。オマーンは親日国、両国交流に尽力してきた著者に勲章を授与したのはその証。本書は日本とオマーンのヒトとモノの交流がつぶさに書かれているが、日本人母とのハーフの王女が生まれた話はひととき興味をひく」とあった。

これより前の4月9日の夜、夕食を終えて寛いでいる私のところに、旧知のトヨタ自動車の岡部専務から電話が入った。「いま、オマーン日本親善協会会長と一緒にいる。ホテル・オークラです。あなたの本の話をしたら、『この本は日本語だけではもったいない。英語にして欲しい』と言っている。いま電話を替わる」とのことであった。次に替わったオマーンきっての財閥の当主でもある本人から、「出版おめでとございます。ところで、エンドーさん、なるべく大勢の人が読めるように、この本の英語版を出版して欲しい。金銭的な支援はさせてもらう」という申し出があった。

「せっかくの申し出だ。英語の本を書くのは初めてで自信はないが、やってみよう」と応諾し、その後一部を甥や友人にも分担してもらって英訳をした。白状すると、評判のよかった「オマーン見聞録」には細かい所で思い込みによる誤記があったが、この英語版の方は甥の寛の協力ですべて訂正し、索引までつけることができた。

どこから出版しようかと友人のつてを使ってドバイやイギリスの出版社にも当たったが、結局オマーン要人のつてでオマーン情報省が出版してくれることになり、英語も同省が手配してくれたイギリス人の専門家に校閲してもらえた。ありがたいことであった。最終的には、情報省に代わって私が出版者となり、印刷・製本はオマーン情報省が紹介してくれた現地の Muscat Printing Press が引き受けてくれた。

そして、2012年に「Oman and Japan-Unknown Cultural Exchange between the Two countries」という題で英語版が出版された。この本はオマーンの書店に並び、オマーンの大学やオマーン日本親善協会等に寄贈できただけでなく、当時オックスフォード大博士課程に在籍していた日本人留学生などを通じてイギリスの大学に、また個人的に米国のアメリカ人大学教授や中国人の北京大学教授などにも渡すことができた。

後日談になるが、この本はオマーンの政府機関からの要請でアラビア語にも翻訳されて、2018年にマスカットの出版社から出版された。ありがたいことであった。

2010年年初めには駐日オマーン大使から、「2010年のカブース国王即位40周年記念行事の一環として、在日オマーン大使館としてはロシア人のセルゲイ・プレハノフ著の英語版「Reformer On the throne」の日本語版を出したいと思っている。ミスター・

エンドー、この翻訳をやらないか」と打診された。翻訳本を出版するのは初めてであったが、私はこれを引き受けた。

出版社の選定も任され、3社を訪問。その中から朝日新聞出版を推薦して、大使の了承を得た。翻訳の方は甥と友人に一部を振り分けて完成し、念のために訳文をプロの翻訳者にも見てもらい、2010年12月に「玉座の改革者－オマーン国王、カブース・ビン・サイード」として朝日新聞出版から出版した。

この本は、「アラビアの賢人」とも称された偉大なカブース国王の人生を描いている。1940年の誕生、幼少年期、イギリス留学、1970年の即位、ドファール戦争、近代国家樹立への国王指揮下でのルネサンスへの歩みがオマーンの歴史も交えて、記述されている。

## 15-2. ドバイ・ショック - 成長のために不可欠な軌道修正の一過程

私が「オマーン見聞録」を出版した2009年の年末に、ドバイで世界を揺るがすような事態が発生した。

既述したように、なんでも「世界一」を目指すムハンマド首長の下で世界中から大胆に投資を呼び込み、ドバイは人工島のパーム・アイランドや七つ星ホテルのブルジュ・ドバイなどの大型開発プロジェクトを進め急成長を遂げていた。

そのさ中の2007年9月に、米国でサブプライム住宅ローン危機（優良客であるプライム層よりも下位の層向けとして位置付けられるローン商品の不良債権化による危機）が発生した。これに端を発して、2008年9月には米国の有力投資銀行である「リーマンブラザーズ」が経営破綻したいわゆる「リーマンショック」が発生し、世界的に株価が下落し世界経済は不況に陥った。

これにより、高いリターンを求めてドバイへ投資してきた欧米を主軸とする金融機関からの資金が先細りとなった。不動産ブームは去り、不動産の価格が暴落して、ドバイ経済の先行きが危ぶまれた。わが国の金融機関にも債権確保の問題が生じた。また大手ゼネコンは、UAE（アラブ首長国連邦）の政府系持ち株会社であるドバイ・ワールドの支払い遅延や、同社傘下の大手不動産デベロッパーであるナキール社の度重なる仕様変更に伴う費用を負担するなどの影響が出ていた。2009年6月時点の国際決済銀行の調査によると、UAE向け融資残高では英国が502億ドルと全体の半分近くを占め、2位がフランスで113億ドル、3位ドイツで106億ドル、4位は米国で106億ドル、日本は86億ドルで5位であった。

この状況下でドバイ・ワールドとその傘下のナキールなどの企業を含めた事業の再編を進めていたドバイ政府は、大規模債務の返済期限を迎えていた2009年11月25日にアブダビから150億ドルの資金を調達したことを発表し、債務の確実な履行を表明した。だが、その2時間後に、同政府がドバイ・ワールドの債権者に対し、500億ドルにのぼる金融債務についての返済期限を6ヶ月以上繰り延べることを認めるよう要請した。

これによってドバイの資金調達が困難になっていることが顕在化し、世界的に株式市況が悪化した。いわゆるドバイ・ショックの発生である。

同25日遅くに、各格付け会社は直ちにドバイ政府系企業の債務格付けを引き下げた。翌26日の欧州株式市場でドバイ政府の債務不履行やドバイへの出資を積極的に行ってきた銀行の債権焦げ付き不安から銀行株が急落、その影響で米国や日本その他の世界中の株式市場でも株価が下落した。

イード・アル・アドハー（犠牲祭）の休日が明ける前の11月29日に、UAE中央銀行が市場へ資金を供給することを表明して、休日後の30日から再開される株式市場の鎮静化を図った。同日ドバイ政府は、「ドバイ・ワールドの債務を保証せず」とし、債権者に事業再編への協力を求めた。また、ドバイ・ワールドの事業再編の対象となる債務額が260億ドルになること、返済について銀行団との交渉が行われていることを明らかにした。

12月1日には、ムハンマド首長はドバイ・ショック後初めての記者会見で「ドバイの信用不安のニュースは誇張されており、それほど懸念していない」と笑顔をみせながら語った。

12月2日のUAE建国38周年の記念の日、ドバイ・ショックにもかかわらず観光地は賑わいを見せ、地元市民は「ドバイの発展が止まることはない」と祝賀ムードに沸いていたという。ドバイの室内スキー場や高級ホテルは湾岸諸国からの観光客で混み合い、市民たちは尊敬するムハンマド首長の写真を張り付け、派手に装飾した車の天窓から身を乗り出して祝賀気分を盛り上げていた。

地元市民は、「ドバイ経済は大丈夫。今回は1企業の問題。仮に債務返済に問題があってもアブダビが支援に乗り出す筈」と危機もどこ吹く風という感じだったという。

ドバイとアブダビの関係は微妙であり、その対応が注目されていたアブダビ政府は、12月4日にドバイ政府に対して100億ドルの支援を決め、このうち41億ドルはこの日に償還期日を迎えるナキール社の債券の償還に充当し、残りをドバイ・ワールドが2010年4日までに必要とする資金に充てることとした。これによって、ドバイやアブダビの株式市場は一斉に上昇に転じた。

同日、UAE中央銀行がドバイ・ワールドに対して債権を持つ国内銀行の支援を発表したことで、ドバイの信用不安は概ね解消されることになった。

ドバイ・ショック直後に、国内で進んでいた巨大プロジェクトは一気に止まった。建設ラッシュの中での仕事を求めてドバイに集まってきた外国人労働者たちも仕事にありつけず、帰国した人たちも多かった。過去の建設ラッシュで、住宅やオフィスは過剰状態。不動産価格も平均でピーク時の2008年の4割に下がり、家賃も下がった。

当初の予定よりも遅れて2010年1月に完成した世界一の高層ビル「ブルジュ・ハリファ」でも完成時点から10ヶ月後で住居の9割が空き家であったという。当初この高層ビルには「ブルジュ・ドバイ」という名称が予定されていたが、オープニングセレモニーで突如アブダビ首長であるハリファ・ビン・ザーイド・アル・ナヒヤーンに因んだ「ブルジュ・ハリファ」に変更された。それは、アブダビの支援に謝意を示すためであった。因みに、「ブ

ルジュ」とはアラビア語で「塔」という意味である。

その後、ドバイはまたその輝きを取り戻した。ドバイ・ショックで世界は一瞬たじろいだが、「中東のハブ」としてのドバイの重要性は変わりがないということであろうか。ドバイは中東やアフリカに進出するにも、地理的な立地、治安や政治的中立性から拠点としても世界の企業にとって不可欠だったのであろう。当時一部の専門家が言っていたように、ドバイ・ショックはドバイが成長を続けるための軌道修正の一過程だったのかもしれない。

### 15-3. 日本オマーンクラブ設立 - 他の湾岸諸国にはない、草の根の友好団体

1998年に日本オマーン協会の活動再開を成し遂げられなかった後も私とオマーンとの交流は続いたが、その間、「日本とオマーンとの交流団体を何としても立ち上げたいものだ」と願っていた。

他のすべての湾岸諸国には経済界からの寄付を得た日本の友好親善団体があったが、オマーンについては当時は草の根の「広島オマーン友好協会」があるだけで、首都圏には友好親善団体一つもなかった。「ホルムズ海峡を臨み戦略的にも重要な国であるのに、このような状態にあることは甚だ残念だ」と私は思い続けていた。ましてや、私はオマーンの友人たちには借りがある。友好親善団体の立ち上げによって、借りをなんとしても返したいものだと思っていた。オマーンとのつながりを持つ国会議員とも友好団体設立について話し合いをしたが、実現まで漕ぎつけることができずにいた。

2010年に私は77歳になっていたが、やむにやまれぬ気持ちで年齢をも顧みず、OCIPED（オマーン投資促進・輸出振興センター）日本代表の森谷を担いで、日本オマーンクラブの旗揚げをすることに踏み切ることにした。大企業から寄付を仰いで政治家や高級官僚をトップとする組織ではなく、「オマーンを好きなこと」だけを会員資格とする任意団体の「オマーン勝手連」を立ち上げた。

目的は、「オマーン理解を深めることと日・オ両国の友好促進」。

具体的な活動としては、

- (1) オマーン情報の交換
- (2) パーティの開催（会員親睦、オマーン要人等来日時他）
- (3) 講演会および文化活動
- (4) 在日オマーン大使館・関係省庁への協力
- (5) 在日留学生と日本人学生との交流の支援
- (6) その他

を定めた。

発起人は、OCIPED（オマーン投資促進・輸出振興センター）日本代表やオマーン情報省日本代表、UNIDO（国際連合工業開発機関）の中東ミッションへの参加者、オマーン

ンに駐在経験のある元社員、オマーン関連のビジネスを展開する女性経営者、教育界の要職を務めオマーンでの学会に出席経験のある主婦などの11人とした。

2010年4月27日に、「日本オマーンクラブ参加へのお誘い」の文書を関係者に配信した。そこには、以下を書き込んだ。

創立総会次第：

日時：平成22年5月28日（金）午後2時～4時

場所：オマーン大使館

当日の予定：

- 13:30 開場
- 14:00 設立総会
- 14:00 開会の辞
- 14:00～14:05 ムスラヒ駐日オマーン大使の祝辞
- 14:05～14:25 森元駐オマーン日本大使のご講演
- 14:25～14:40 設立総会（規約等の説明、質疑応答）
- 14:40～14:45 Talk Oman のPR
- 14:50～15:50 懇親会

また、「周りのオマーン好きの方もお誘いの上、奮ってご参加ください」、「クラブの年会費は2000円、当日会場にてお支払いください」とも付け加えた。

参加への誘いに応じて会員になったのは132名、オマーンを好きな人間がそんなに多くいることに驚いた。

当日は、13時30分に開場した。受付には、会員有志の他に日本湾岸学生協会と日本中東学生会議に所属する学生にも並んでもらった。設立総会への出席会員が95名。当時大使館には60脚余りの椅子しかなかったので、開会の直前に隣の社会福祉法人「福田会」に借りて走り、何人かで何回か往復して準備した。会場は、大勢の人の熱気で沸き立っていた。

総会の司会は、私が務めた。駐日オマーン大使の祝辞、当時の森元駐オマーン日本大使に「オマーン報告」と題した講演をしていただき、その後に規約の説明、理事や監査候補の紹介等を行い、承認を得た。また、会長にはOCIPED日本代表の森谷、事務局長には私が選任されたことを報告した。両大使と理事や監査には胸に大きな花をつけてもらい、会場は華やいだ雰囲気に包まれていた。

その後、懇親会が約1時間続いた。出席した会員は、大使館から提供されたデザートやケーキやお茶やオマニ・コーヒーを手にしながら、駐日オマーン大使、駐オマーン日本大使との、また会員同士の会話を楽しんだ、

クラブにとって幸いだったのは、設立した年の2010年が国王即位40周年に当たっていたことであつた。発起人の一人であるオマーン情報省日本代表の女性に、本国から「記念のイベントをやるように」という強い指示が来ており、彼女は何かやらざるを得ない状況にあつた。そこで、クラブが協賛して2008年に広尾に完成したオマーン大使館を会場に

して、毎月「Talk Oman」というシリーズの講演会をやることとした。その様子は毎回オマーンの現地紙で大きく報道されることとなり、イベントは大いに盛り上がった。

その年度には、以下の講演会が行われた。

2010	タイトル	スピーカー
4月	「オマーンが見えてくる」	遠藤 晴男（オマーン専門家）
6月	「イスラムの人々の暮らし」	小玉 弥生（オマーンの高校への留学経験者）
6月	「中東地殻変動とオマーン」	脇 祐三（日本経済新聞社論説副委員長）
7月	「オマーン・アラブ馬と流鏝馬」	金子 家暢（武田流弓道第36代司家）
8月	「オマーン民族衣装と十二単」	大田桜台高校文化部＋写真部 十二単着付け指導／江口 雪絵先生
9月	「香りの伝統－日本とオマーン」	木下 忍（香舗天年堂取締役）
10月	「アラビア半島の真珠：オマーン」	森本 剛史（トラベルライター）
11月	「女性の社会進出／オマーンの場合」	Nidhal Al Jaradi（オマーン人留学生）
12月	「オマーンの学校教育」	近藤 洋平（東大博士課程）
2011		
1月	「オマーンでGEOツーリズム」	青木 正博 （産業技術総合研究所地質標本館名誉館長）
2月	「オマーン：スライドで見る海洋帝国の栄光の歴史と現代」	福田 安史 （ジェトロ・アジア経済研究所研究員）
3月	「オマーン見聞録」	遠藤 晴男（オマーン専門家）

講演会は、その後の日本オマーンクラブにおいても活動の柱の一つとなり、いまでも年に3、4回は行われている。

なお、首都圏で日本オマーン友好団体として日本オマーン協会が2011年11月に発足した。日本オマーン友好団体としては、他に1994年設立の広島オマーン友好協会と2010年設立の奈良オマーン友好協会、2023年設立の山梨・オマーン友好協会がある。日本オマーン協会を除いては、草の根の友好団体である。このような友好団体を持つ湾岸の国は他にない。

#### 15-4. アラブの春 - カブース国王の水際立った対応

それは、「この先何が起こるのか」、「この世の終わりがくるのではないか」、底知れない不安に駆られながらじっと見たテレビの映像であった。



エジプトの旗やムバラク大統領の似顔絵を描いたプラカードを持って、カイロ中心部のタハリール広場に足早に急ぐ若者の列また列、クローズアップされる高揚感いっぱいの若者たちの顔また顔。エジプトの旗やムバラク大統領の似顔絵のプラカードが広場を埋め尽くした人々の頭越しに掲げられ振られ、こぶしを突き上げる若者たちの途方もないエネルギーがみなぎる夜のタハリール広場。これを制止しようとするエジプト政府の治安部隊による催涙弾や放水を浴びて逃げ惑う若者たち。

前年チュニジアで起こったジャスミン革命によって触発され2011年1月25日のエジプト革命の始まりの映像であった。

2010年12月17日、チュニジア中部のシディ・ジブド市で失業中の若者が野菜や果物を売り始めたところ、販売の許可がないことで警察によって商品を没収された。これに抗議してこの若者がガソリンをかぶって火をつけ、自殺を図るといった事件が起こった。これに怒った市民の抗議デモのニュースが衛星放送で伝わると、国民の不満が爆発、全国規模で政権打倒の民主化デモが拡大した。そして1か月も経たない2011年1月14日にベン・アリ大統領はサウジアラビアへ逃亡し、それまで23年間続いた長期独裁政権があっけなく崩壊した。

これが瞬間にエジプトに波及した。当初エジプトでは、社会構造の違いや政治に対する意識の違いからチュニジアの状況の波及はないだろうと思われていたが、5～7%の経済成長の下でも、若年層の失業率の高さや貧富の差の拡大に不満が募っており、抗議の焼身自殺が相次いだ。チュニジアの飛び火を避けるのに必死のエジプト政府。そんな中、民主化を求める青年組織「4・25運動」のFacebook やtwitter (現 X) を使っての呼びかけで実現した1月25日のデモ、このデモはそれ以降連日タハリール広場で続き、またスエズ、イスマイリア、シナイ半島などへとエジプト全国に広がっていった。そして、2月11日には、30年間政権の座にあったムバラク大統領が辞任に追い込まれた。

この動きは、同年2月にはヨルダン、スーダン、モーリタニア、ジブチ、イエメン、リビア、モロッコ、レバノンなどへ波及し、まさかと思われていた湾岸の王朝君主制国家のバーレーン、クウェート、サウジアラビア、またオマーンにも波及した。まったく思いもかけないことだった。

1月14日のチュニジア大統領の国外逃亡を受けて、同17日、オマーンの首都マスカットでは200人から300人のオマーン人が官庁街に集まり、生活必需品の価格の高騰や政治家の汚職を非難し、給与の増額を求めで最初のデモ行進が行われた。2月11日のエジプト大統領の辞任の後の同18日に2回目の抗議活動が同規模で1回目と同じ要求を掲げてマスカットで行われた。

25日にはサララでも数百人が生活の改善や政治改革を求めて集結して、座り込みを始めた。26日には北部のソハールで約2,000人が集まり、警察との衝突に発展した。

警察は催涙ガスを発射して対抗、この騒ぎは翌27日も続き、警察による催涙ガスとゴム弾の使用で抗議者側に死者1名が出た。翌28日には、これに抗議して警察幹部の処

分等を求める抗議者約300人がマスカットの諮問評議会前に座り込んだ。

これに対して、カブース国王は目を見張るような速さで対応した。26日に6名の閣僚を交替させ、翌27日には5万人の雇用創出、求職者への手当の支給、最低賃金の上げを打ち出し、28日には検察機関の独立と物価上昇対策として消費者保護庁を設立した。

上記のソハールやサララ等の国内主要都市での大規模な抗議活動が続き、またマスカットを中心に企業の職場や学校等で比較的小規模な抗議活動が発生する中、国王は3月5日には宮内大臣や国王府大臣、7日には12名の閣僚を交替させ、初めて諮問議会の議員を閣僚に選出した。12日には、これもオマーンで初めてオマーン議会に立法権と監査権を付与した。要求の完遂を求めて座り込みを続ける者もいたが、これにより、抗議していた人々の大半が政府の対応を要求の80%が達成されたと評価して、抗議活動への参加者の数が減少していった。

この減少が続く中、政府や宗教界から抗議活動停止の呼びかけが行われた29日に治安部隊がソハールの抗議者を一斉拘束した。4月1日にはこの拘束者の解放を求める約400人の抗議者と治安部隊が衝突して抗議者から死者1名が発生した。5月12日には、警察と治安部隊がマスカット、サララ及びスールで座り込みをしていた抗議者を一斉に拘束した。3日から14日に拘束された者の釈放を求める抗議者と軍が衝突したものの、15日以降は抗議活動は発生せず、騒動は約3ヶ月ぶりに収束した。

この一連の活動を通じて目立ったのは、何と云ってもカブース国王の国民の要求に対する見事な対応であった。その迅速さと的確な対策は目を見張るものであった。生活必需品の価格の高騰や政治家の汚職を非難し、給与の増額に対しても適切に対応した。

抗議者の要求が体制の変革ではなく、その大半は国王に対する忠誠を表明し、問題があるのは閣僚たちであり、国王に対する批判はしていないことも幸いであった。チュニジアやエジプトや他のアラブ諸国で叫ばれたような体制転覆は要求されなかった。デモ発生後の国王の対応を見て、3月1日にはマスカットで数千人規模の国王支持デモが発生し、国内各地で国王支持デモが多発した。

ただ、カブース国王の指導の下でのオマーン・ルネサンスによって近代国家に生まれ変わり、人々の生活も向上したと見られたオマーンで死者がでるようなデモが発生したことは驚きであった。繁栄を謳歌する中で、貧しい生活を送っている人、失業に喘ぐ若者たちが大勢いたのである。その負の側面をこの騒動が見せてくれたのである。こういう人々の不満が一部の大臣たちへの辞任要求にもつながったのであった。

本稿は、村上拓哉の「2011年オマーンにおける抗議活動の展開と収束—紛争の非エスカレーションの事例として—」という論考に基づいているが、村上は「この先オマーンにおいて体制の転覆が国民から要求される事態に至る可能性は低いものの、「デモ」を起こすことを学習した民衆は、今後は不満があれば集会を開き、直接的な行動に移していくことを躊躇わないことが予想される。新たに立法権を付与された議会が、今後国民の不満を吸い上げる装置としてどれだけ機能していくかが課題となるだろう」と結んでいた。

「アラブの春」は、バーレーン、クウェート、サウジアラビアなどの他の湾岸諸国にも波及した。

もっとも危機的であったバーレーンでは、2月14日に反政府デモが行われ、警察との衝突で1名の死者を出し、翌日葬儀に集まった群衆と治安部隊が衝突してさらに1名の死者が出た。シーア派が多数のバーレーンでは反政府機運が強く、政府と民衆の攻防が繰り広げられた。政府はデモ隊に対し催涙弾やゴム弾を発射する一方、政治犯などを釈放して懐柔策をとったが、効果なくデモ隊の一部からは王政打倒の声も上がった。バーレーン政府はGCC（湾岸協力会議）軍の派遣を要請、サウジアラビアとUAEから1500人規模の軍・治安部隊がバーレーンに派遣された。バーレーンはパキスタンなどから大量に元軍人や警察官などを採用して治安部隊を強化し、デモ隊の排除に乗り出した。3月15日からは戒厳令を施行し、事態は沈静化に向かった。

サウジアラビアでも2月から3月にかけて東部州シーア派地区で小規模ながらデモが続いた。スンナ派住民の間でも、2月にサウジアラビア自由青年同盟という組織が、インターネットで3月に首都リヤドを中心に大規模な民主化デモを行うことを呼びかけた。宗教界は国民に冷静な対応を求め、デモは不発に終わった。アブドゥラー国王は3月18日にテレビ演説で、国民の忠誠に喜びを表明、治安部隊や宗教界に謝意を示し、公務員の昇給、最低賃金の確定、住宅ローン拡充など社会福祉政策を発表して解決した。

クウェートでは、2月ごろからビドゥーン（無国籍者）の権利要求運動が、3月になると、若者から首相の更迭や汚職批判や賃上げ要求のデモが発生し、治安部隊との衝突で30人が負傷した。11月に数百人のデモ隊が首相の汚職疑惑を巡り議場に乱入、内閣は総辞職。サバハ首長は12月に国民議会を解散した。

チュニジアやエジプト、後でリビア等では政権が倒れたのに、かねてから危ないと言われて続けていたにもかかわらず、王朝君主制の湾岸諸国はどこも政権が倒れることはなかった。この政体の下で、国民は特段の不満もなく幸福な生活を享受できているのである。この点は銘記すべきではないかと思う。

#### 15-5. アハジージュ - オマーンクラブの見学ツアー

オマーンを語る上で欠かせない、イスラーム、ベドウィン、ラクダ、デーツ、アラブ馬などのうち、ここまで触れてこなかったアラブ馬について、日本との関わりを中心に述べてみたい。

今から30年ほど前、ご成婚後初めての外遊となった中東の湾岸諸国訪問の一環で、皇太子同妃殿下（現在の天皇陛下並びに皇后陛下）は、1994年11月9日（水）から11日（金）までの3日間オマーンを訪問された。

当時JICA専門家としてオマーン商工省で働いていた私は、在オマーン日本大使館より日本からの報道陣に対応するよう依頼され、初日午後のマスカット空港でのお出迎えと

翌日のニズワ訪問の際の現地ヘリポートでのお出迎えとニズワ城の見学に随行させていただいた。

初日の9日の12時にインターコンチネンタルホテルに集合して報道陣担当班の打ち合わせを済ませた私は、3時前にロイヤル・エアポートに到着した。両殿下が最初の訪問国であるサウジアラビアからマスカットにご到着される空港は、出迎えのオマーンのスイニ国王代理や各大臣、日本大使や外交団が次々に到着して緊張感に包まれていた。その日もマスカットは快晴、気温は軽く30度を超えていた。

そのうちに真っ青に晴れ上がった空に機影が見え、やがて両殿下が乗られた特別機が着陸した。オマーンに初めて着陸した「日の丸」が付いた飛行機の姿がぐんぐんと近づいてくる、機体の「日の丸」が目には沁みだした。飛行機から降りてこられた両殿下のお姿を拝した時には、「はるか遠くのオマーンの地にまで来てくださった」と感動で私の胸は熱くなっていた。

2日目の朝7時に、私は日本の報道陣と一緒にバスでニズワに向かった。途中のホテルで時間調整をし、オマーン側の車に先導されてニズワ郊外のヘリポートに向かった。やがて5機のヘリが轟音を響かせながら飛来、3機目のヘリから両殿下が降りてこられた。私は密着取材陣を先導する役目だったので、両殿下のお姿を至近距離から拝見することができた。

ニズワ城では、長い階段を登り切った塔のてっぺんで皇太子殿下がカメラを取り出され妃殿下を撮られると、妃殿下もカメラを取り出されて皇太子殿下のお姿を撮られていた。また、風の吹く中、皇太子殿下が手を伸ばして妃殿下の帽子を直されるなど、まるで二人だけの世界を楽しまれているようにお見受けし、親しみと敬愛の念を強く覚えた。

私はそのままマスカットへ戻ったが、その後皇太子殿下同妃殿下はニズワホテルでご休息された後、郊外の砂漠に張られた国王専用旗がたなびくロイヤル・テントに滞在中のカブース国王と会見され、昼食に続いて砂漠の中でのラクダの行進やアラブ馬の曲乗りなどを楽しまれた。

それは、砂漠に太陽が沈みかかるころまで続いたショーの後のことであったという。国王から両殿下に雌の駿馬が贈られた。純血アラブ馬で、名前は「アハジージュ（アラビア語で『歓びの歌』の意味）」。

紀元前一世紀頃に北方からアラビアにもたらされた馬は、ベドウィンの手によってすべての品種の中でもっとも純血なアラブ馬が作られた。アラビアというと、ラクダやラクダレースが知られているが、馬は崇高でアラブ文化を象徴するものとして知られている。中東では、このアラブ馬を贈呈することは最高の友情と尊敬の証だと言われている。その馬が両殿下に贈られたのであった。

アハジージュは、翌年の1995年5月に船でイギリス人獣医とオマーン人世話人に付き添われてオマーンを出発して7月に日本に到着。宮内庁厩舎で過ごした後の同11月に、栃木県塩谷郡高根沢町にある宮内庁御料牧場に移された。

日本オマーンクラブでは、発足後2年目の2011年にこのアハジージュを見る会を企画した。10月8日（土）の午前9時に、貸切バスで東京駅を出発。参加者は43名。往路

のバスの車中で、私が1994年の皇太子殿下・同妃殿下のオマーン訪問にお手伝いをさせていただいた者として、カブース国王からの「アハジージュ」贈呈に関する説明を行い、関連資料を回覧した。

この往路バスの車中で、思ってもみなかった名誉なことがあった。元東宮侍従の会員が、今回の日本オマーンクラブ会員の見学に際して、皇太子・皇太子妃両殿下からクラブへのお言葉をいただいていたのである。その会員が読み上げた「今回の訪問がよりいっそうの両国間の友好親善促進の一助になることを希望いたします」との両殿下からのお言葉に参加者一同は大感激し、日・オ両国関係の友好促進への思いをいっそう強くしたのだった。

予約しておいた途中の天然うなぎの老舗レストランで食事をして、御料牧場には予定通り13時に到着した。そこで御料牧場長と担当課長が当方のバスに乗り込んでくださり、最初に貴賓館の前に停車した折に車内で配布された資料に基づいて、御料牧場についての説明を受けた。

その後、われわれ一行はアハジージュの厩舎前でバスを下車。その前の広場で厩舎から引き出されてきた「アハジージュ」と対面した。誕生したのが1990年2月7日であったので、当時は11歳8ヶ月。意外と小柄でおとなしそうに見えた。ずっと立っている姿が優美で、気品が感じられた。色は栗毛よりさらに黒っぽい。たてがみと尾はやや金髪。4本肢の内3本に白い斑がある白斑3肢。説明をしてくれた担当係長によると、アハジージュはアラブ馬特有の従順さを備えているとのことであった。おとなしそうという私の感じはこのせいだったのであろうか。

その後、近くに展示されていた貴賓者用の馬車を見学。同じく担当係長からの説明を受けた。その後、菜園場に移動。担当官からの説明を受けながら見学。さらに、その後、牧場長の説明を受けながら、鶏舎、羊舎、豚舎、肉加工場、製酪所、乳牛舎を順次バス車内から望見した。ここで、外国大使の信任状捧呈の際の馬車列や皇室で用いられる乗馬と輓馬が育てられ、また、皇室の方々のご日常やおもてなし、宮中晩餐、園遊会など内外賓客接伴のための牛乳、肉、卵及び野菜などが生産されていることを知った。そこでは、新鮮かつ高品質な品物を生産することはもちろんのこと、化学肥料や農薬などを極力控えるなどの説明も受けた。

最後に御料牧場長、担当課長などの見送りを受けて14時40分に御料牧場を出発。約2時間に亘る充実のアハジージュ見学であった。

帰路に会員が懇意の「益子焼つかもと」に立ち寄り、益子に縁の深い棟方志功や浜田庄司の作品を鑑賞。その後に、隣接する「ましこ悠和館」を訪れ、第二次世界大戦の末期に当時の皇太子殿下（現上皇陛下）が疎開先としてご使用になり、「終戦の詔書」の玉音放送（昭和天皇による終戦の詔書の音読放送）をお聴きになられた部屋を見学した。

帰路途中の交通渋滞もあり、東京駅帰着は予定より大幅に遅れて暗闇に包まれた午後8時近くであったが、参加者一同充実の1日であった。

後日私はオマーン大使館を訪れ、ムスラヒ駐日オマーン大使に、両殿下からのお言葉と今

回の訪問で見たアハジージュの現況をカブース国王に伝えていただくように要請した。

なお、「アハジージュを見る会」は、2013年10月26日（土）にも同じく会員43名が参加して行われた。この時には、先に「益子焼つかもと」に立ち寄り、御料牧場はその後の見学となった。常設展示されている「棟方志功」や「浜田庄司」などの作品の他に、特別展の「山下清の東海道五十三次展」も見学した。

皇太子殿下は2001（平成13）年の歌会始で、アハジージュのことを以下のように詠まれている。

「草原をたてがみなびかせひた走る アラブの馬は海越えて来ぬ」

このアハジージュは、2018年4月7日に御料牧場で亡くなった。28歳であった。馬の寿命は23歳から30歳と言われているので、長寿だったと言えよう。訃報に接して、両殿下はカブース国王にご報告と感謝の気持ちを伝えられたと仄聞している。

アハジージュは、1997（平成9）年4月にアングロアラブ種との間に「豊歎（とよよし）」という雄の子供を御料牧場で産んでいる。名前は、その年の歌会始の天皇陛下御製「うち続く田は豊かなる緑にて 実る稲穂の姿嬉しき」からの「豊」とアハジージュの意味「歓喜の歌」からの「歎」とをとってつけられた。日本オマーンクラブのメンバーは、2016年10月26日（水）に皇居厩舎を訪ねて、「豊歎」との対面も果たしている。

なお、豊歎は2021年にアハジージュがいた御料牧場に移されたが、2022年12月に25歳で亡くなった。墓は、2013年に死んだアハジージュの墓の隣に作られ、たてがみとしっぽが埋納されていると仄聞する。

実は、私は日本オマーンクラブの催しとは別に2003年夏にすでに御料牧場でアハジージュと対面していた。これはOCIPED日本代表の森谷のアレンジによるものだったが、オマーン王立厩舎のアラブ馬の写真展を日本各地で行った写真家の佐藤美子も同行し、その時に撮ったアハジージュの写真も何枚かもらっていた。

それは、その翌年に私が森谷と一緒にオマーンを訪れ、友人のオマーンの寄進・宗教大臣から頼まれた日本の野菜の種を持参してマスカット近郊のバーティナ地方の農園を訪れていた時のことだった。農場の経営を任せられたヨルダン人とのビジネス・トークや農園見学を終えたところで、くだんの大臣が突然訪ねてきた。

「いま、カブース国王が『ミート・ザ・ピープル』で近くの土漠でキャンプをされている。自分も随行で宿泊しているが、時間が取れたのでいまここに来た」というではないか。驚きであった。そこでたまたま持参していた佐藤からもらったアハジージュの写真を見せたところ。大臣から「この写真は私から国王に渡したい。もらってよいか」との申し出があった。そこで「いいよ」と答え、「カブース国王に『アハジージュはこのように日本で元気にしている』と伝えてもらいたい」と依頼した。

「分かった」と言って大臣は帰って行ったので、カブース国王にその写真が渡ったのは間違いない。実は、この写真を大臣に渡すかどうかで、私には迷いがあった。公的なルートではなく、国王にわれわれ民間人が直接に渡してよいものかどうかという点であった。

いま思うと、この点については、大臣が「国王に渡したい」と言っていたので、なんら問題はなかったと思う。あの時に「いや、私たちは昨年アハジージュに会っている。その時の話もしたい。国王に写真を献上する時には、私たちも同行したい」と申し出ていれば、あるいはキャンプ地でカブース国王にお目にかかれたのではないかと思われる。残念なことであった。

## 15-6. オマーン・ツアー - オマーンクラブならではの内容

日本オマーンクラブを立ち上げた翌年の2011年3月に、東北大震災が起こった。これに際してオマーン政府は日本に多額の義援金を寄付してくれたが、さらにオマーンスポーツ省はその年の7月にオマーンで行われた「サマー・スポーツ・イベント」に被災地の大学生と高校生、合わせて6人を招待してくれた。

駐日オマーン大使の要請によりこのプロジェクトの推進に協力した日本オマーンクラブは、在日本オマーン大使館の学生の選抜作業を手伝った。それから、同年初めに定年退職により帰国していた住友商事マスカット支店長を勤めた畏友の石崎丈雄を派遣団の団長として同大使に推薦し、オマーンに行ってもらった。この石崎の退職後のプランは、日本の人たちにオマーンを知ってもらうことを目的としたオマーン専門の旅行会社の立ち上げであった。彼は、学生たちの引率という大役を果たしての帰国後、すぐに旅行社「ウィルファースト」を設立し、既存の旅行社で6ヶ月間の旅行実務の実習も行った。

実務経験を積み、満を持しての石崎の提案を受けて、日本オマーンクラブでは、設立3年目の2012年度事業として、「日本オマーンクラブのオマーン・ツアー」を催行した。

日程は、2013年1月26日（土）から2月2日（土）までの7泊8日。参加者は石崎も含めて26名。私も案内人兼ツアーの補佐役としてこれに参加した。そのスケジュールは下記の通り。

第1日目	1月26日（土）	21時20分	成田発
第2日目	1月27日（日）	10時00分	マスカット着（アブダビ経由）
			ロイヤル・オペラ・ハウス見学
		15時30分	駐オマーン日本大使公邸表敬訪問
			マトラとオールド・マスカット観光
第3日目	1月28日（月）	9時30分	ホテル発 ワヒバ砂漠へ
		14時00分	砂漠着 砂漠ドライブをエンジョイ
			砂漠内のキャンプ泊
第4日目	1月29日（火）	8時00分	キャンプ発
			ニズワとジャバル・アフダル観光
		16時00分	マスカット着
		18時00分	夜のオールド・マスカット観光

		19時15分	オマーン人日本留学経験者と日本人会有志との懇親会
第5日目	1月30日(水)	8時45分	ホテル発 グランドモスク、アムアージュ工場見学 見学後、ナハール城へ
		20時30分	バフワンオマーン日本親善協会会長表敬訪問
第6日目	1月31日(木)		全日フリー
		10時00分	イルカ見学ツアー (=オプションツアー、参加は希望者のみ)
第7日目	2月01日(金)	8時00分	ホテル発
		10時50分	マスカット発
		11時55分	アブダビ着 バスにてドバイ見学へ
		21時50分	アブダビ発
第8日目	2月02日(日)	12時50分	成田着

なお、4日目までのマスカットのホテルは市内の4つ星ホテルであったが、5日目からは海岸ベリの豪華な5つ星ホテルに宿泊した。

この旅行は、日本オマーンクラブが催行したもので、普通のツアーではありえないプログラムが含まれていたことを特記しておきたい。まずは、日本大使公邸への表敬訪問。ここでは、大使にスライドを使って「オマーンという国」、「大使館の役目」などについて説明をしていただいた。

オマーン人の日本留学経験者や在オマーン日本人会有志との懇親会も特別なものであった。マスカット市内の日本食レストラン「東京太呂」で行われ、日本酒を飲みながらの現地と日本の情報交換は参加者には楽しいものだった。

現地のオマーン日本親善協会会長への訪問もクラブならではの企画であった。トヨタの特約店を務める会長は、オマーンでも指折りの財閥の当主。事務所の豪華さに一同圧倒された。

2日目のロイヤル・オペラ・ハウス見学も特別であった。2011年10月にオープンしたばかりで、まだ見学ツアーが始まっていないころのことであった。私と商工省で同僚だったオマーン人が観光省の局長に昇進していたので、東京から彼に特例での見学ツアーのアレンジを依頼した。返事は、「できるかどうかは分からない。マスカットに着いたら、観光省に連絡をして欲しい」というものだった。オマーンに到着した日にホテルから観光省の担当者に電話をすると、「管轄の国王府から、見学許可がまだ出ていない」との返事であった。

初日からハプニング。私は仕方なく行先を武器博物館に急遽変更した。そこでは、参加者は屋内の展示品や屋外での戦車や戦闘機の実物の展示品を見たり、触ったりして楽しんでいた。そんなさ中に、観光省の担当者から「国王府の許可が取れました。オペラハウスに1



2時半までに入ってください。それを過ぎると見学はできません」との連絡が私の携帯に入った。私は屋内外に散在していた人々に早くバスに戻るよう走り回りながら告げて、なんとか一行を指定の時間までにオペラハウスに連れて行くことができた。「観光省がもっと早く言ってきてくれていたらよかったのに」と恨みがましく思ったものだった。

湾岸諸国初の王立オペラハウスは、収容人数こそ1100人と多くはないが、一同はオマーンの大理石を使ったイスラーム様式の建物の威容、絢爛豪華なロビーや内部、ひときわ目立つ舞台中央のパイプオルガンなどに圧倒された。オペラ好きのツアー参加者の「こんな素晴らしいオペラハウスは日本にはない。ぜひ日本の演奏家たちにここで演奏をして欲しいもの」とのコメントが心に残った。

一般の旅行会社ではできないであろう、きめの細かい場所への案内や説明もこの旅の特徴であった。石崎も私も、それぞれ3年、4年間マスカットに住んでいたのも、オマーンについては詳しい知識も持ち合わせている。さらに、このツアーの企画には当時マスカットに駐在して10年近い双日の森田にも加わってもらっていた。マスカットでどの場所をどの時間に見るのが一番よいのかまで精通していた。オールド・マスカットの街を一望できる場所についても熟知していた。そこは、ルイの方から走ってきてマトラの街を過ぎた、リヤミという標識のある所を右折、1929年にオマーンで初めて舗装された山道を登ったところであった。

オマーン人の日本留学経験者と日本人会有志との懇親会も森田が駐在していたからこそ、アレンジできたことであった。見学する場所の説明も微に入り細に渡った。また、オペラハウス見学時のような突然の予定変更にもツアー企画者各人の経験があればこそ、容易に対応できたのであったと自負している。

ツアーへの参加者は、オマーンやアラビアへの旅が初めてという人が多かった。マトラスク（市場）やオールド・マスカット、ニズワ城やナハール城などの景観はインパクトが大きかったようだった。オマーンの人たちの民族衣装も刺激的だったかもしれない。

一行が一番楽しんだのは、やはり砂漠だった。3日目の砂漠でのスリリングなドライブには、参加者みんなが歓声を上げた。唸り声を上げるエンジン、急勾配の砂丘を駆け上がる車体、砂丘の底をめがけて駆け下る車体の中で頭を天井に打ち付けんばかりの揺れ。

夕方の砂丘の頂。見渡す限り砂、また砂。地平線まで一面の砂丘が続く。西に夕陽がまさに沈もうとしている。まさに、一幅の絵であった。

食堂で夕食を終えて砂漠のあちこちに散在する宿舎に戻る。仰ぎ見る空には満天の星と月。目を凝らすと月と星が動いているのが見えた。「おやすみなさい」との挨拶を交わしえて各人が宿舎に戻った。

翌朝は、5時に起床。ラクダに乗っての砂漠ツアーを希望した参加者数人が宿舎から起き出して砂漠の中の宿舎を囲む柵の入り口に集まった。ほとんどが女性であった。まだ暗い。一行は遊牧民が手綱をとるラクダに乗って砂漠ツアーへ。砂漠でラクダに乗る。とくに女性には、ロマンチックなものなのであろうか。一同大満足。かくして、砂漠ツアーは終わった。

このオマーン・ツアーの最後にドバイ訪問を加えた。ドバイと言っても、時間の関係で2010年に完成した828メートルと世界一高いブルジュ・ハリファに登ると周辺の散策、パーム・ジュメイラをバスで見学しただけであった。ブルジュ・ハリファの上からの眺め、ドバイ・モール建物の前にある噴水、中にある世界最大の水族館などはさすがであった。

ドバイでも特別のアレンジをした。かねて日本湾岸学生協会の代表を務め、当時ドバイに在住していた旧知の金子にあらかじめブルジュ・ハリファの入場券の手配や案内を頼んでおいた。心強かったが、これも日本オマーンクラブ主催の旅行ならでのことであった。

このツアーの参加者で、世界各地を旅行している会員の女性に「ドバイはどうでしたか」と訊いたら、「私はオマーンの方が好き。ドバイは人工的な感じがする。それに喧騒の世界。オマーンではアラブが感じられる。私はオマーンの方が落ち着ける」と言われた。私は、「ドバイのやり方も文化の一つだろう。ただ、ドバイは砂漠に造った植木鉢。金さえあれば誰にでも作れるもの」と言っているのだが、彼女のコメントを「我が意を得たり」と聞いた。